

博士論文の和文要旨

論文題目 ロゼッタ・ロイにおける記憶と語り

氏名 越前貴美子

イタリア人現代作家ロゼッタ・ロイ（1931年～）は、1974年に『自転車』を発表して以来今日まで「記憶」を語り続けてきた。ロイのテクストを読みながら、「記憶」と結びついた人間的営みである「語る」行為について考察するのが論文のテーマである。

4章に分かれた論文では、まず第1章において、ロイの第1作目である『自転車』の冒頭部分を紹介することで、今日まで発表された全作品の「通低音」と呼ぶべきロイの語りの特徴を紹介する。そこでは、動詞、句読点、接続詞の省略といった文法上の破格やジェレンディオや名詞化の頻繁な使用などが一種の小気味良いリズムを作り出し、過去の時間が場面として効果的に次々と表象される中、読者は登場人物の行為や情景を眼前で見ているかのような臨場感を覚えながらロイの記憶の世界に足を踏み入れる。ロイにおいて過去の時間は場面として提示されることで、現在時を獲得している。

ロイが語るのは第2次世界大戦と時を同じくする彼女自身の子供時代の記憶であり（作家は第2次世界大戦開戦当時8歳であり、14歳で終戦を迎えた）、特に注目すべきは、保守的カトリックの環境に育った作家がそこにユダヤ人の迫害の歴史的記憶を重ねて語っていることである。ロイにそのような記憶を語ることに向かわせたのは幼い心に刻まれた身近なユダヤ人を助けることができなかったという罪の意識であるが、果たして非体験者であるロイに迫害体験者の歴史を分有し語ることは可能なのだろうか。この問いを出発点として、以下の章において、テクストに書き込まれた作家ロイの記憶の表象の全体像を描くことが論文の目的である。

第2章では、迫害の体験者とロイの語りの相違点ならびに類似点を照らし合わせることにより、ロイが非体験者としてこのテーマを語ることの妥当性と分有の可能性を考察する。体験者の例として、やはりイタリア人作家であり化学者でもあったブリーモ・レーヴィを中心にすえ、その他イタリア人以外の体験者である作家たちも引きながら、体験者がショアーという未曾有の出来事をいかに語っているかを概観しつつ、証言や歴史的記述と文学的叙述の差異、体験を語ることの根源的な意味、非体験者に伝えることの可能性と不可能性、体験を語る際に必要な虚構、体験者が語ることの困難などについて考察し、その一方で、ロイの語りにおける個人的記憶と集団的記憶（ユダヤ人の歴史を含む）が重なり合う様子を、幼いロゼッタが戦争とは別の次元において当時抱いた恐怖、不安、疑惑、喪失、失望に焦点を当てて分析する。

第3章では、実際ロイがいかに二つの記憶を表象し、迫害のテーマを分有可能な形で語っているのかを、読者がテキストを読む際に感じる違和感に注目し、そこに書き込まれたさまざまな歪みを詳細に分析することで考察する。また、不可解な謎が書き込まれた虚構による筋立てにも注目したい。これら違和感や不可解さをかもしだす語りの内実を明らかにするために、特に2つのテキスト『水の門』と『ハンセルマンのホットチョコレート』を選んで取り上げる。これらのテキストを特徴付けるアレゴリーの多用、どんでん返し、過剰と欠落、「ジャッロ」仕立ての筋立てなどに、ロイはいかなる意味を付与しているのだろうか。この「謎」を解くための鍵として、論者は「幻想文学的読み」を試みる。すなわち、テキストを幻想文学的に読み解くこと（幻想文学の特徴を確認したうえでロイのテキストにおける特徴との一致を確認し、幻想文学のいくつかの例からヒントを得ながらテキストを読み解くこと）で、作者の語りの意図が明らかになるのではないかと仮説をもとに二つのテキストを分析する。そして結論として、独特の雰囲気をつくりだすものになっているこれらの特徴が、ショアーのテーマを扱うロイのテキストの「読みの可能性」を生み出すために不可欠であることを論ずる。

さらに、テキストに書き込まれたもうひとつの歪みとして、当論文において「記憶の風景」と名づける記憶の表象について分析を行う。ライトモチーフの繰り返しとまなざしによって捉えられ場面として提示される「記憶の風景」が示すのは、常に現在に投影され過去にならない過去である。この行き場のない過去は、迫害を受けたユダヤ人の歴史そのものではないだろうか。なぜならロイの表象する過去は、どれだけの時間が経過しようと落ち着き先の見つからない、痛みを伴った現実だからである。

ところで、過去の投影としての現在という形をとるロイの記憶の表象は、論者が修士論文で取り上げたラッラ・ロマーノの記憶の表象と対極に位置する。このことに注目して、ロイの語りにおける「わたし」の過去と現在の位置関係に焦点を当てるために、ロイとロマーノ両者の記憶の語りにおいて、語り手と登場人物の「わたし」の関係を分析する。その結果、過去の「わたし」と現在の「わたし」が同一線上に位置するというロマーノの記憶の特徴に対して、それらの間に断絶が見られるロイの記憶の特徴が浮き彫りとなる。

以上のことから、歪みという形で描かれたロイにおける「記憶の風景」は、まさにこの断絶の結果であることがわかる。過去は行き場を失い、読者のカタルシスを拒む。このように作家は痛みを伴った彼女自身の個人的記憶を差し出すことで、集団的記憶の暗部に限りなく寄り沿おうとしている。これは作家の「自分も罪を免れない」という考えに基づいており、迫害を人類全体の罪として捉えようとする姿勢である。

自分をも罰を受ける者として書き込んだロイの記憶の表象に確認した歪みは、作家がユダヤ人迫害の記憶を個人的記憶に重ね合わせて語るとき、不可避のものである。論者は作家が不可避のものとして表象するこの歪みを、「罪と等価な罰」、つまり、他人にした罪を身をもって知るという中世的な概念「contrappasso」として描いているのではないかと推論する。神を失ってしまったユダヤ人の記憶を語るために、作家は神なき時代の概念を採用するしかなかったのではなかろうか。論者は『水の門』と『ハンセルマンのホットチョコレート』におけるゴシック的な雰囲気の原因がここにあると考える。

最終章第4章では、ロイの思想的変遷を比較的近年に発表された3つのテキストを参照しながら辿る。まず1995年に発表された『ハンセルマンのホットチョコレート』では、「罪」と「赦し」のテーマを取り上げる。このテキストにおいてロイは非体験者の理解がいかにあるべきかを問い、それにひとつの考えを提示し、言葉少なに「赦し」のテーマについて思索する。ひとつの考えとは、ユダヤ人問題を考える際に、「哀れみ」ではなく「正義」に基づいて思索するということである。カトリック教の大きな支柱ともいえるべき「哀れみ」の概念を曲解しユダヤ人に差し出すことの過ちを語るこの作品は、イタリア人読者の倫理観に正面から異議を申し立てるテーマの重さと、推理小説の形式を取り入れたことによる読ませる妙により大きな話題を呼んだが、2年後に発表された『ユダヤという言葉』は、さらに教会への、そして自分や家族への弾劾というはっきりとした形となってあらわれる。最後に取り上げるテキストは2004年に発表された最新作『思い出の樹は黒く、空は青い』で、ロイの語り今まで見られなかった大きな変化が見られる。この作品において作者は初めてユダヤ人問題から離れ、自伝的世界からも離れて語っている。ユダヤ人問題から離れて語られたとはいえ、やはり戦争は「黒」に象徴される忌まわしい記憶に満ちている。ところが、そこにはかすかな希望が書き込まれている。それは作家が人間に直接託した希望というより、人間を大きく包む何ものかに託した希望であるが、ロイがこの作品において初めて希望を書き込んだことは、作家における思想の変遷として注目に値する。ロイが登場人物に願った幸せな記憶は、ユダヤ人問題を離れることでようやく可能となった。

第4章の最後では、『思い出の樹は黒く、空は青い』のタイトルに込められたメッセージについて考察する。作者はこのタイトルをシルヴィア・プラスの詩（『アリエル』の「月といちいの樹」）の一節からとったという。このことにヒントを得て、論者はプラスの世界を参照しながらロイの世界を一望するという作業を行い、両者にいくつかの類似点を認めた。このことは、プラスの世界を幻想文学のゴシック的世界の延長線上に見るというプラスの日本人研究者の意見を参考にするとき、第3章において論じたロイの「謎」を解く鍵とし

て「幻想文学的読み」を提案したことどこかで繋がっているかもしれないと気づかせてくれた。

『自転車』を発表して以来 30 年間、ロゼッタ・ロイは戦争と家族の記憶を重ねて語り続けてきた稀有な作家である。記憶を絶たれたものに代わり記憶を語り継ぐ彼女の活動は文学作品の執筆に限られない。ロイは現在もローマ在住で、今もなお不穏な顔をのぞかせるファシズムの脅威に対抗すべく、政治的な活動に積極的に社会参加する闘う作家である。